

サマセット・モーム著『Red』と日本語訳『赤毛』の 一読者による比較検討（Ⅲ）

— 翻訳の方法と疑問点を生成 AI に訊く —

綾 皓二郎*

Email: aya.k2015h27@gmail.com

*: みやぎインターカレッジコープ

◎Key Words 生成 AI, 精読, 翻訳論, 同化翻訳, 差別語

1. はじめに

この報告は2016PCCと2020PCCでの「サマセット・モーム著『Red』と日本語訳『赤毛』の一読者による比較検討」の発表⁽¹⁾⁽²⁾を引き継いだものである。この二つの報告で翻訳の方法や翻訳文について自分なりの考え方と多くの疑問点を提示したが、その後それらについて納得のできる説明を得ることはできないままになっていた。しかし、近年になって生成AIの力を借りることで、これらの解明を試みることができるようになったので、第3報として副題「翻訳の方法と疑問点を生成AIに訊く」を付けて報告することにした。使用した生成AIは主にChatGPTとGeminiである。ただし、この論文では生成AIとの詳しい質疑応答は、頁数との関係で省いている。

2. 原著『Red』と翻訳『赤毛』

検討の対象とした日本語訳『赤毛』を発刊順に訳者の年齢を付して記す：中野好夫訳（岩波文庫、1940、37歳）⁽³⁾、中野好夫訳（新潮文庫、1959、56歳）⁽⁴⁾、朱牟田夏雄訳（南雲堂文庫1960、54歳）⁽⁵⁾、朱牟田夏雄訳（岩波文庫、1962、56歳）⁽⁶⁾、北川悌二訳（講談社文庫、1978、64歳）⁽⁷⁾、行方昭夫訳（DHC、2015、84歳）⁽⁸⁾、行方昭夫訳（Gakken、2024、93歳）⁽⁹⁾である。これらの訳者は、英文読解の達人、翻訳の名人、英文学・モーム研究の大家と呼ばれている⁽¹⁰⁾。

文献(5)は脚注が付いた対訳版である。文献(8),(9)は、解説付きの対訳版を含む。文献(9)は、文献(8)の一部の語句を修正した復刻版である。

3. 講義訳と出版訳

「講義訳」とは、大学等での講読形式の授業で使われる学生向けの英文和訳の翻訳であり⁽¹¹⁾、対訳本における翻訳が典型的である。講義では構文が理解できているか、単語の意味や表現が理解できているかを訳読で確かめることが最優先課題となる⁽¹²⁾。そこで、その翻訳は、日本語としてごちない訳や原文が透いて見えるような和訳となることが少なくない。『赤毛』では、講義訳は文献(5)と文献(8),(9)の対訳である。

他方「出版訳」は、不特定多数の一般向けに出版される

翻訳である⁽¹¹⁾。通常、和訳のみが提供されるので、日本語として自立した訳文にまで練り上げる必要があり、自然な日本語訳であることが最優先課題となる。『赤毛』の出版訳は、文献(3),(4),(6),(7)と(8),(9)の翻訳版である。

4. 朱牟田訳『赤毛』（岩波文庫）の検討

岩波版『赤毛』⁽⁶⁾が南雲堂版の講読訳⁽⁵⁾を出版訳としたことが適切かを検討する。岩波版の翻訳は、南雲堂版の対訳の日本語訳とほとんど同一で、手を入れた訳文は10数箇所の語句だけである。これから判断すると、翻訳版としては問題があるであろうことが予想できる。実際、この翻訳に関しては、朱牟田が出版訳と講義訳（英文解釈）とで訳文を見事に差異化している⁽¹⁰⁾という指摘はあたらない。また、朱牟田訳には文芸翻訳とは言い難い不自然な訳文が少なくなく、日本語の文章が破格⁽¹³⁾という評価からも大きく外れている。たとえば、差別語を除いても、次のような疑問／違和感のある訳文が見つかる⁽¹⁾⁽²⁾。

・受動態をそのまま訳すと不自然になる。

He climbed stiffly down the ladder and was rowed to a little cove.

（小さな入り江にボートで運ばれた）船長に視点を固定するために、運ぶ行為者（部下の水夫）を示す必要がないので、受動態が用いられている。

・返り読みする訳し上げは読み手に負担をかけるので、語順通りに先に概要、次に追加／詳細情報の順で訳すほうが分かりやすい。

There was a grand piano littered with music（楽譜の散らばったグランドピアノがあり）。

He was boarding with a half-coast trader who had a store ... at edge of a native village.（海岸ぞいに二マイルほど言った土人の村のはずれに店をかまえていた、ある混血の商人のところに彼は下宿していた）。

・原文が透けて見える訳文が少なくない。たとえば、whole-heartedly（全心的に）この訳語は造語か？

fancied himself（自分自身を空想した）。

filled the coconut trees with their clamour（にぎやかな声でココヤシの木立を一ぱいにしていた）

・50代の、粗野な男が「ぼく」「私」、教養のある男が「わ

し」と言っている。また、彼らは「〜かしら」という女言葉を使っている。

・擬声語・擬態語が 30 語以上も用いられていることで、訳文の格調が損なわれている。モシヤモシヤ、ポチャポチャ、ペチャペチャ、ゲラゲラなど。

・語句の繰り返しがくどい。うねうねうねっている、一すすりすすった、かきむしられるようにかきむしられる、すこしもかわらず〜すこしもかわらず、など

・不適切な訳語やこなれていない訳文が少なくない。

to come to some agreement (何か協定が成立する) 島の果物類と本物のタバコを交換する取引の場面で、「協定が成立」では不適切な訳であることはいうまでもない。

apathy (痴呆状態) apathy は無関心で、医学用語の痴呆 dementia とは異なる。

to keep house for a white man (白人の内妻になる)。keep house は平易な語で内妻になるでは硬い表現になる。

She had burnt down the hut (その小屋は火にされてしまった) 火にされるとは普通いわない。

Neilson gave a gasp. (声をのんだ) give a gasp は息をのむこと。ここは声をのむではなく、息をのむ場面。声をのむは別の意味である。

I'd be very glad if you'd stay and have a bit of dinner with me. (ゆっくり食事でも一しょにしていきなさい)。Google 検索では「このフレーズは、モームの短編『レッド』などで使われる、少し古風で丁寧な招待の表現です。自然な訳例: もしよろしければ、夕食でも一緒に召し上がっていただけると嬉しいのですが」とある。

岩波文庫の編集者は訳文の多すぎる不自然さや間違いに気づけなかったのだろうか。

5. 行方訳『赤毛』(DHC, Gakken) の検討

第一の問題は、対訳版で精読と翻訳の対象とする『Red』は、原文を丸ごと全部使っているが、原作が正確に翻刻されていないことである。すなわち、行方版『Red』は、原作にない独自のセクション別の構成をとった上で、原作のパラグラフ (paragraph) を大きく改変している (計 27 箇所)²⁾。そこで、元の原文を読めないものであるから、行方版『Red』で作品の全体を味読することは、難しい課題となることに注意が必要である。

第二の問題は、対訳版ではセクション別をあらかじめ知らせてもパラグラフを大改変したことはまったく説明しないで、精読と翻訳の講義をしていることである。

最初にパラグラフの改変の概要を示す。大セクションは原作のパラグラフの切れ目で五つに分けているが、これらを小セクションに分けるときに原作の 1 パラグラフを 2 分割している場合が計 8 箇所ある。さらに小セクション内で改行してパラグラフを細分割している場合が計 19 箇所もある。これらのパラグラフの大改変がなぜ『Red』全文の精読に必要な説明が一切ないのである。

次にパラグラフの改変が引き起こす問題について述べる。原作での長い 1 パラグラフはモームの独特の文体にあるといわれている。たとえば、長い時間の流れのなかでの情景描写を 1 パラグラフとする。また主人公の心理描写では畳みかけるように文を重ねることで緊張感をもった 1 パラグラフとする。こうした文体のパラグラフを細分割すると、情景描写の時間的連続や心理描写の緊張感が切断され、モームの意図したトーン (tone) とは異なる英文となってしまう²⁾。たとえば、セクション 5-2 の半ばで、原作の 1 パラグラフを行方版『Red』では、以下に示すように 4 パラグラフに分割している²⁾。

Neilson watched him make his way across and when he had disappeared among the coconuts he looked still. Then he sank heavily in his chair.

Was that the man who had prevented him from being happy? Was that the man whom Sally had loved all these years and for whom she had waited so desperately? It was grotesque.

A sudden fury seized him so that he had an instinct to spring up and smash everything around him. He had been cheated. They had seen each other at last and had not known it. He began to laugh, mirthlessly, and his laughter grew till it became hysterical.

The Gods had played him a cruel trick. And he was old now.

この一節は、ニールスンの幻想がグロテスクな現実によって打ち砕かれ、怒りと虚脱が押し寄せる、小説のクライマックスの場面である。モームがこれを 1 つのパラグラフに収めたのは、圧倒的な心理的緊張感を読者に強いるためと考えられる。他方、行方がこのパラグラフを 4 分割したのは、ニールスンの感情変化の段階をきちんと分析することが精読には欠かせないという学習的配慮と推測される。しかし、この分析的読解では、改行によるパラグラフ分割で作者の意図が軽んじられ、読者の心理的緊張感が減殺されてしまう。精読には正確な文法訳読にとどまらず、文体の読解も含まれるという観点にたてば、パラグラフの改変による文体の解体は致命的な損失であると考えられる。

第三の問題は、講義訳と出版訳の接続関係が不明で、出版訳の全体がどのようにして出来上がったのかが分からないことである。講義訳のセクションが出版訳にセクションとして反映されていないことは当然のこととして了解できるが、これだけでなく、行方版『Red』のパラグラフと出版訳の段落は 1 対 1 対応していないのである。出版訳では、小セクションでのパラグラフ分割を 1 段落に戻さない場合もあれば、理由を示さずに、1 段落に戻している場合もある (たとえば、上記 5-2 の半ば)。出版訳の段落数は、読みやすさを考慮したのか、原作のパラグラフ数と比べて 39 段も増加している。

朱牟田の対訳版では原文のパラグラフに変更はなく、対訳版と出版訳の段落は、原文のパラグラフ通りである。したがって、訳文は一段落が長いものが多いので、日本語

の文章としては読みやすいとはいえない。

第四の問題は、行方の訳文が他の訳者の訳文とは大きく相違する箇所があり、これをどう理解すればよいか、新訳と先行訳の解釈の違いで済ませることができるか、ということである。ここでは、次の2点を指摘する。

第1点は、'A year,' I cried to myself. 'I have a year. I will spend it here and then I am content to die.' という文章の訳読である。行方の訳では、cry は「叫ぶ」ではなく「しっかり言い聞かせる」として語順を変えて文末に置いている（ただし、朗読版で音声聴くと確かに叫んでいる）。しかし、語順通りに読むと別の解釈が得られる。すなわち、この文章は、文頭に 'A year' の語を置き、直後に I cried to myself を割り込ませて叙述の流れを中断することにより、主人公の強い感情（心の中での叫び）を衝動として提示し、引き続く文で、自覚から決意、諦念へという心の推移を簡潔に表現していることが分かる。朱牟田と北川は語順通りにこの解釈で訳している。他方、行方訳では主人公の昂ぶった感情が消えて、心情の状況説明となり、モームの表現意図から外れた訳となっているといえないだろうか。

第2点は、原文は一続きの一節であるが、行方版『Red』ではセクション 4-1 の末尾と 4-2 の冒頭にパラグラフ分割されている節の訳読についてである。

[...] It was when he first came to the island, ..., coarse sensuality, a sick man, trying to resign himself to the loss of the career which had fired his imagination with ambitious thoughts. [ここで分割] He set behind him resolutely all his hopes of making a great name for himself and strove to content himself with the few poor months of careful life which was all that he could count on.

行方の訳は、朱牟田と北川の訳と比べて、意味が追加され、かなり踏み込んだ解釈が見受けられる訳となっている点を列挙する：coarse sensuality を「下卑たセックス」では露骨な表現となる。原文は a sick man といっているだけなのに「不治の病」と断定している。the career を「運命」と訳すと抽象化しすぎる。trying to resign himself は、状況や運命を「甘んじて受け入れようとする」という意味であるのに、「必死になって頑張っていた」では主人公の心理／振る舞いが能動的でポジティブな印象を与える。making a great name を「有名な学者」とまで特定するのは行きすぎであろう。the few poor months を「無念な数ヶ月」と訳すと、感情移入が強すぎることにならないか。strove to content himself は「我慢しようと努めた」というよりは、不本意ながらも現状で満足するしかないと読める。

行方の訳では感情をかなり前面に出して主人公の心理を説明しているので、モーム特有の抑制された語り、トーンからは外れているという印象を受ける。

6. 同化翻訳の検討

『赤毛』にある文化的・社会的・時代的・地理的距離を縮めようとする訳語は、原文のトーンを歪めて伝えるこ

とになる⁽²⁾。代表的な例を次に示す：原語 → 訳語

- Red (書名) → 赤毛⁽³⁾⁻⁽⁹⁾
- the Saturday Evening Post → 土曜夕刊新聞⁽⁵⁾⁽⁶⁾, 土曜週刊誌⁽⁸⁾
- passed into the darkness → 死んだ⁽⁸⁾⁽⁹⁾
- his disease → 結核⁽⁸⁾⁽⁹⁾
- a concertina → アコーディオン⁽⁸⁾⁽⁹⁾
- a tunic → シャツ⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁷⁾, 上衣⁽⁵⁾⁽⁶⁾, 上着⁽⁸⁾⁽⁹⁾
- a Mother Hubbard → 簡単服⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾
- the bungalow → バンガロー⁽³⁾⁻⁽⁶⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾

これは同化翻訳といわれるもので、原文にある異文化的な要素や時代的な背景を翻訳先の文化になじみ深い表現に置き換えて翻訳する手法である⁽¹³⁾。上記の訳語が同化翻訳であることは生成 AI で確認できる。

同化翻訳された訳語については、英文学者でもある訳者の翻訳観が問われているのではないだろうか。同化翻訳により訳文は確かに読みやすく親しみやすくなるが、失われるものは小さくないことを次に示す。

最大の問題は、『赤毛』が『Red』の訳題として適切といえるかである⁽¹⁾。モームは作品のテーマやモチーフ、人物を象徴する一語のタイトルを好んだことが知られている（たとえば、『Red』や『Rain』）。『Red』というタイトルには、いくつかの象徴的な意味が隠されている⁽¹⁾。すなわち、'red' は、恋の情熱、若者の純粋さ、生命力、死の影、船長の粗暴さ、怒り、破壊を象徴している。書名を『赤毛』と訳すと、これらの多層的な意味が失われる。赤毛は人物の外見的特徴を表す説明的な意味しかもたない。

『Red』は分かりやすい訳題ではあるが、文学的な意味を失っている。英文学者でもある訳者は、象徴の意味は分かっていたはずであるが、訳題を『赤毛』とする理由や 'red' の象徴の意味を著者解説で説明していない。『赤毛』は最初の訳者の中野が付けたものであるが⁽³⁾、後進の英文学者はなぜかそれを踏襲している。ただし、英文学者でない訳者は、『赤』、『レッド』を訳題としている⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾。

The Saturday Evening Post という、20 世紀アメリカを代表する雑誌の固有名詞を一般化して訳してしまうと、文化的・時代的背景と国民的雑誌という格が完全に消えてしまう。大衆誌ではあるが、フォークナーやフィッツジェラルドなどの純文学の作品がしばしば掲載されていること考慮すれば、英文学者が文化的アイコンである雑誌名を直訳することは適切である、とはいえないのではないか。行方は、文献⁽⁹⁾では「サタデー・イブニング・ポスト」と改めている。文化的距離を残す価値があると判断をしたと推測する。

passed into the darkness のような典型的な婉曲表現を「死んだ」と直接的に訳すと、平板にすぎる。ニールスは初対面でもあるので相手に配慮して最初は丁寧な遠回しの表現を使ったのではないか。なお、「あの世にひっこし」の訳⁽⁵⁾⁽⁶⁾では安っぽい感じがする。

his disease」としか書いておらず、モームは病名をわざと曖昧にしている可能性が高い。原文にはない情報を補充して「結核」と断定することでよい。

a concertina はアコーディオンとは構造も音も違う楽器で、当時の社会階層・地域文化を示す文化記号である。「アコーディオン」と訳すと、社会的・文化的距離が消えてしまう。バンジョーとアコーディオンが並ぶ訳文では釣り合いがとれず違和感がある。

a tunic これを一般的な語に置き換えて訳すと、この衣服のもつ社会階層性を失う。衣服も文化記号である。

a Mother Hubbard は、植民地時代に宣教師がサモア等の南海の島々に持ち込んだ女性用の家庭着である⁽¹⁾。これを「簡単服」と訳すと、文化的・時代的・地理的距離が消えて、社会階層と生活文化が不明となる。

the bungalow 「バンガロー」はカタカナ語を使った見かけの異化翻訳で同化翻訳とはいえないが、文化的誤読を生む同化とみなせる。「バンガロー」は日本語では キャンプ用の宿泊小屋を連想するが、bungalow は南海の島々に見られるヨーロップ風の平屋様式の木造家屋である。

以上のように、同化翻訳は、誤った文化的イメージを読者に与えることが往々にしてあり、作品の文学的価値を損なう可能性が小さくないというデメリットがある。現代の文芸翻訳においては、同化翻訳で読みやすさを確保しつつ、重要な文化的要素には異化翻訳を取り入れるというアプローチが重視されている、といわれている。翻訳術を解説する対訳版⁽⁸⁾⁽⁹⁾では、同化翻訳の訳語を選択したことに言及があってもよかったと思われる。

7. 差別語の検討

精読においても、『Red』が白人優位主義の時代に書かれた小説であり、さらに訳出時の日本の社会状況や翻訳事情を踏まえたうえで、『赤毛』の差別的表現を、現在の視点から批判的に読み解くことが必要と考える。『Red』に native, Chink, savage, half-cast などの差別語が使われていることからモームに植民地主義的な偏見があったことは否定できないが、『Red』や『Rain』で白人側の退廃や醜悪さを描いており、白人優位主義への皮肉や懐疑が伺えることも事実である。

『赤毛』では中野訳の没後 1994 年の改版でやっと「土人」「土語」「酋長」などの差別語が改められた。行方は、「訳で差別用語とも受け取れる表現が使われているが、作品のオリジナリティを尊重するため、差別を助長する意図は一切ない」と断りを入れている⁽⁸⁾⁽⁹⁾（たとえば、試訳での‘Chink’の訳語「シナ人」）。ただし、Gakken 版でも解説に「現地妻」という差別語が残っている。さらに、先行訳の『赤毛』には、障害者に対する、どめくら、痴呆、気ちがい等の差別語が使われていることにも注意が必要である⁽¹⁾。

英文学者であり教育者でもある訳者、およびプロ編集

者に、差別という認識がなぜ持てなかったのかを解明しておくことは重要である⁽¹⁾。英文学者は「原文に忠実であること」を翻訳の至上命令としていたこと、編集者は英文学者の権威に抗えず、訳文を尊重し差別語を放置したことが考えられる。サモアが 1962 年に独立しても、訳者と編集者には翻訳を改める理由として認識されなかった。国内で差別語に対する批判・是正運動が本格化したのは 1970 年代以降で、それが文学の翻訳表現にまで波及して、訳者と編集者の意識を変えるにはさらに十数年の歳月を要している。

8. おわりに

俵 万智が国語の古典教育について次のように述べている⁽¹⁰⁾：（ある高校生の和歌「業平の一途な恋が黒板に品詞分解されゆく午後」を引用して）文法と語彙の知識で現代訳して一丁あがり。業平の和歌の芳醇な香りも味わいも消え果ててイケメンのレントゲン写真のようなものが残るだけ。意味がわかったところでスタートするはずなのに、意味が分かることがゴールになっていた。これは、英語の「文法訳読」の授業にも当てはまる指摘である。

生成 AI が精読においても文体や作品の背景、翻訳論などの質疑応答で有益であることを確認した。

参考文献

- (1) 綾 皓二郎：“サマセット・モーム著『Red』と日本語訳『赤毛』の一読者による比較検討”，PC カンファレンス論文集，pp.115-118（2016）。
- (2) 綾 皓二郎：“サマセット・モーム著『Red』と日本語訳『赤毛』の一読者による比較検討（II）”，PC カンファレンス論文集，pp.197-200（2020）。
- (3) S.モーム，中野好夫（訳）：“雨：他二篇”，岩波書店（1940）。
- (4) S.モーム，中野好夫（訳）：“雨・赤毛”，新潮社（1994）。
- (5) S.モーム，朱牟田夏雄（訳註）：“赤毛—対訳 Somerset Maugham”，南雲堂（1960）。
- (6) S.モーム，朱牟田夏雄（訳）：“雨・赤毛他一篇”，岩波書店（1962）。
- (7) S.モーム，北川悌二（訳）：“雨・赤毛”，講談社（1978）。
- (8) 行方昭夫：“英文精読術—東大名譽教授と名作・モームの『赤毛』を読む”，DHC（2015）。
- (9) 行方昭夫：“英文精読術—東大名譽教授と名作・モームの『赤毛』を読む”，Gakken（2024）。
- (10) 齊藤兆史：“英語達人列伝II”，pp.147-175，中央公論新社（2023）。
- (11) 稲垣直樹：“翻訳技法実践論”，p.11，p.57，平凡社（2016）。
- (12) 菅原克也：“英語と日本語の間”，p.155，講談社（2011）。
- (13) 山本史郎：“翻訳の授業”，p.152，p37，朝日新聞出版（2020）。
- (14) 井上英三：“南海の人々：赤”，人文書院（1942）。
- (15) 小牟田康彦：“一葉の震え：レッド”，近代文藝社（2015）。
- (16) 俵 万智：“言葉の豊かさに触れること”，文藝界，9月号，pp.59-61（2019）。